

1989. 10



おひきとねがう

No. 20

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

本とつきあう

1. 『東京ブックマップ』

このガイドブックを知っていますか。「何かのテーマについて本を探す人が、すばやく目的の場所に到達できるよう編集」のコンセプト。新刊書・古書・図書館蔵書を並列させています。〈東京23区書店・図書館徹底ガイド〉の副題どおり、書店街マップ・大書店ガイド・専門書店ガイド・大図書館ガイド・専門図書館ガイドの5パート・そしてINDEXに分かれています。

新刊書を購入するのも、古書店を歩きまわるとも、図書館でコピーをとるのも、— 情報の入手という点で —、みな同じ。こう気づくと本とのつきあい方も変わってきます。

(注)『東京ブックマップ'89-90』(東京ブックマップ編集委員会・編集、書籍情報社・発行、89年3月20日刊、800円+消費税)

2. おひきとりねがう

最初に本を書斎にもちこむ。本屋から、古本屋から、図書館から、どの場合もおなじことだとすると……。こんどは、書斎から出ていってもらったときにも同様な事態があると推測されます。図書館に返却する、古本屋に売る、友だちにあげる、ちりがみ交換に出す、ゴミ収集に出す。どの場合も、内容の情報を利用したあとの媒体(本や、雑誌・新聞)を、社会に返還するという点では共通します。「産業廃棄物」として社会的再利用にゆだねるわけです。

ですから、本を入手するときには、すでにそれが不用になったときのことを考える。どのくらい長く— 書斎の机のまわりに— 滞在してもらおうかを、最初から考えた方がいいのです。

一般教育科講師

柴崎力栄



3. 「いる」「いない」

わたくしたちは無意識のうちに、情報に対して「いる」「いない」の判断をしています。本が相手の場合には、目録を引くよりも、開架書棚に並んだものを手にとった方が、的確・迅速な判断ができます。これが、専門図書館や、専門書店のメリットです。

かつて、角川書店刊『ドキュメント昭和』シリーズの巻末年表をつくるアルバイトをしていたことがありました。昭和戦前の自動車工業の概観をえる必要が生じたとき、大手町にある自動車工業振興会の「自動車図書館」に行ってみました。国会図書館なら数日かかる本の検索が、— 開架書庫で直接本を手にとって —、一時間で済んでしまいました。いつもの図書館だけでなく、目的に応じて専門の施設に足を運んだ方が、上手な仕事の仕方になるようです。

4. これはなにかありそうな

図書館の書棚のあいだを歩きまわるとき、本屋の棚のまえで立ち止まる瞬間、研究情報誌の文献目録に目をとおしながら、途中下車した街で古本屋めぐりをしつつ……。本当に知りたいのは、個々の本や、文献ではないように思います。自分が漠然と感じている問題のカタマリの、ひろがり、おくゆき、かたち、でしょう。

自分の認識を深めてゆくためのきっかけになれば、それでいい。そのためにこそ、情報のシャワーを浴びつづけたい。本に出会うとき、こんな言葉が心に浮かびます。

初めての海外旅行

工大・IB2 本間 玟成

僕は今年の夏に韓国へ旅行をしました。何年ぶりなのかわかりませんが、家族7人うちそろった7泊8日にわたる“無茶苦茶な”旅となりました。

僕は旅行するにあたって、図書館で韓国に関する本を借りてきて、かたっぱしから読みました。せっかく生まれて初めての海外旅行に行くのだから、その国についての知識を持たないとつまらないと思ったからです。これは正解でした。韓国という国は日本とはまったく違った国際情勢下にあることを本を通して、また現実でも知ることになったからです。

皆さんは韓国が未だに戦争体制にあることを知っていますか？ 日本では想像できないけれど、街角に兵士の姿なんてごく普通で、デパートの中にまで兵士が巡回してくるのが今の韓国の現実です。飛行機からの写真撮影や港湾、山頂などでパチパチやったりするとたちまちフィルムを抜かれてしまいます。むろん軍事的な理由からです。いちばん生々しく感じたことは、38度線に行った時のことです。有名な板店門までは行けなかったのですが、途中山でもないのにコンクリートのトンネルがあり、不思議に思っていると、横の人が「戦争になった時、あれを爆破して戦車の進んで来るのを10～20分遅らせる

ためだ」と説明してくれました。トンネルは2、3ヵ所見かけたようです。検問所では機関銃を持った兵士が嚴重にチェックをしていました。

また、毎月15日は「国民防災の日」で、20分くらい戒厳令なみの態勢がしかれます。戦前の日本でも行なわれた空襲避難訓練みたいなものです。このことは本を読んで知っていたから、8月14日の日は安心してソウルの街をブラブラしていました。ところが、“サーティワン”でアイスクリームを買って、食べながらのんびり歩いていると、さっきまで沢山いた人が一人も見当らず、気がつくときすべての店はシャッターを閉じていました。おかしいな、と思いつつなお歩いていると、いきなり怒鳴り声が飛んできました。見ると兵士が恐ろしい顔でこちらをにらんでいます。おおあわてでホテルへかけ戻ると、ここにも兵士がいて、柱の看板には「防災の日」と書かれていました。一体どうなっているのだろうかと思ってしまう。後でわかった話。8月15日が日本からの「解放記念日」に当たるため、防災の日は14日に繰り上げられたとのこと。

その他にもいろいろなカルチャーショックを受けた旅行でしたが、やっぱり見知らぬ外国へ行く時は、その国の知識を詰め込んで行ったほうがいいと実感できた初めての海外旅行でした。その点からも図書館ではいろいろ参考になる本が利用できて大いに役立ったと思っています。



「最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう？」

こういった曖昧な記憶を辿って行くことからこの章は始まる。

著者特有の奇妙な表現で、記憶の糸が描かれて行く。

一人の人間が、到達するはずの道、死について考えるまでに至る。

そして死は著者自身に、中国人のことを思い出させてしまう。

何故、死が中国人のことを思い出させるのか。そのことは、一切の謎に包まれる。



「中国行きの
スロウ・ボート」

村上春樹 著
中央公論社

人工衛星から送られる映像では、無限の闇を彷彿させる空間、時折、浮かぶ仄かな灯が人々の静かな暮しを連想させる。

どこまでも続く地平線、緑なす草原。時間を感じさせない、広大でのんびりとした場所。初めて持った中国の印象だった。

しかし、時が巡り、事態は急変して行く。やがて信じられない瞬間を目の当りにすることになる。

数百とも数千ともいわれる死者が出たと伝えられた。ほんの少しの行き違いから生じた出来事が春の訪れさえも遠避けてしまったように。

この瞬間を暗示していたかのような一節が随所に飛び込んでくる。

彼女が静かに叫ぶ。

「ここは私の居るべき場所じゃないのよ。」

彼女の言う場所とは、一体何を意味しているのか。

そして、次の言葉で終わる。

「だからもう何も恐れるまい。

もしそれが本当になうものなら…

友よ、友よ、中国はあまりに遠い。」

1980年の春から、1982年の夏にかけて発表された七つの短編が年代順に収められている。この書は、著者自身にとって最初の短編集でもある。

中国行きの貨物船(スロウ・ボート)に
 なんとかあなたを
 乗せたいな、
 船は貸しきり、二人きり……

—古い唄—

(K.W)

シリーズ淀川ぶらり散策

第11話

「大阪城 その1 太閤となにわの夢」

浅井三千治

淀の川面を秋風が吹き渡る。波間に映る大坂城の天守は、一瞬くずれ乱れるが、再び何事もなかったかのように、美しい姿を現わす。

「橋は長さの美を、城は高さの美を持つ」と言われるが、空高く聳える天守の姿は他を押し、威風堂々としていて美しい。

天正11年(1583年)天下統一を目指す秀吉は、信長公記に「大坂は凡そ日本一の境地也。其子細は、奈良京都に程近く、ことさら淀鳥羽より大坂城戸口まで、船の通り直にして、日本の地は申すに及ばず、唐土高麗南蛮の船、海上に出入り、五畿七道ここに集まり、売買利潤富貴の港たり」と記されているように、交通経済両面において秀れているのみならず、軍略的にも適地であったここ大坂の地に、気宇壮大な城下町の建設に取り掛かった。

秀吉は、幾多の合戦の経験を通じ、これからの戦いは、堅固かつ攻撃的視点に立った城の構築と、活発で大規模な経済活動が行われる城下町の建設が不可欠であり、これなくして天下平定の大事業の達成は不可能であることを、彼独特の勘をもって見て取っていた。

大坂城が築かれた難波台地の北端は、かつて織田信長と足掛け10年に及ぶ戦いを結び、信長を苦しめた一向一揆の本山である石山本願寺の跡地で、地層が堅固な上、淀川・大和川の2大河と海によって東、西、北の3方を囲まれた要害の地であり、かつ台地の西下には平地が広が

りを見せ、大城下町建設に適しており、秀吉の天下統一構想実現にとって、またとない夢の地であったといえる。

築城と城下町建設を、秀吉は、織田信雄・徳川家康の連合軍と、天正12年3月から11月まで小牧・長久手で戦い、翌13年には根来雑賀討伐を行なう等、戦闘を展開する中で、行ったのであった。まず、天正11年11月に天守の土台を完成させ、翌12年8月には新築なった殿舎に入り、さらに13年には天守を完成させている。

天守は、城のシンボルとも言えるが、天守の構築は比較的新しく、信長が安土城築城の際に築いて以来とされる。ポルトガルの宣教師フロイスは大坂城のことを、「まず甚だ宏大な城を築き、その中央に甚だ高い塔を建て、堀・壁および保塁を設けた。-----その宏大・精巧・美観は新しい建築に匹敵する。ことに重なる塔は金色および青色の飾りを施し、遠方より見え一層荘厳の観を呈している。」と伝えているが、黄金に輝き、空に向かって聳え立つ天守の姿は、天下人となった秀吉が世に示した、己れの富みと権力の象徴であった。

この天守に立ち、眼前に広がる海原、周りを囲む山々、淀・大和川の流れ等々を足下に、天下を睥睨する秀吉の有頂天は、いかばかりのものであったであろうか。

この後、秀吉はさらに城下町を整備し、大阪を大都市へと発展させて行った(次頁へ続く)



のであった。

慶長3年(1598年)8月、秀吉は「つゆとを
ち つゆときへにし わかみかな なにわの事
も ゆめの又ゆめ」の辞世の和歌を遺し逝った。
天下を統べ、年老いてもなお、見果てぬ秀吉

の夢とは-----一体どのようなものであったの
であろうか。

第11話「大坂城 その1 太閤となにわの夢」完
(中央図書館)

図書館活用の手引き⑱

奉仕係

「地図」とつきあおう!

地図の歴史は古く、現在知られている最古のものは遥か4500年前のパピロニアの地図にまでさかのぼります。我国では、奈良時代の正倉院御物の中に、麻布に描かれた東大寺領荘園の地図数点があり、現在最古のものとして残っています。

しかし、世界史上地図の歴史にとって画期的な時代となったのはルネッサンス期以降、15・16世紀に至ってからです。印刷術の発明は地図の量産を可能にし、新大陸を求めての大航海時代は地図の需要を社会的なものにしました。

情報化時代といわれる今日になっても、地図の持つこの「情報」としての価値は少しもおとろえていません。むしろ、百聞一見といわれるように、視覚に訴える直截性は地図の持つ利点をいかに発揮させ、単に位置関係を表示するにとどまらず、各種データを図上に積載することにより無数の多目的地図さえ可能となりました。目的地にたどりつくための案内機能や地理的環境だけでなく、その土地土地の持つ自然的・歴史的・文化的な景観や現在の状況、将来への予測などもそうした各種の「主題地図」を通じて把握できるようになりました。

さらに、地図自体が1枚の紙片からテレビや映像の世界へとメディアを拡張させることにより、情報伝達手段としての地図の役割はますます大きなものとなりました。本や雑誌といった活字資料だけでなく、こうした情報豊かな地図類と

いかにうまくつきあうかが、いまや効率的な資料収集や研究活動にとっての一つのポイントとなったといえることができるでしょう。

中央図書館では、3階の第2図書室に地図コーナーを設け、学生・教職員各位の利用に供しています。

主な所蔵資料としては、国土地理院発行の『2万5000分の一地形図』、全国津々浦々ほとんどの地域、枚数にして4千数百枚があります。さらに、『5万分の一地形図』約1200点も所蔵しています。

身近で実用的なものとしては、大阪府一円や京都市などの『精密住宅地図』(縮尺1200[or1600]分の一の詳細図で、各住居の戸主まで表示されている)があり、常に最新の状態で開架されています。

このほか、我国の国勢を総合的に示した『日本国勢地図帳』、参考図書コーナーの「地理」(分類番号290台)の書架には各種分県地図、都市・市街地図、道路地図、都市計画地図や世界大地図などの地図帳(アトラス)のほか、変わったところでは『繁華街情報地図』『旅に出たくなる地図』、山岳地図や古(歴史)地図なども配架されています。

しかし、地図類の所蔵は残念ながら現状ではやや貧弱で、収集にも統一を欠く面がありますので、今後は一そう充実させていきたいと考えています。

皆様も地図を有効に活用されますとともに、購入・収集についてご意見、ご要望をお寄せいただければ幸いです。

◆◆◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆◆◆

春樹ブーム、ばなな現象と騒がれた台風は、当館にも吹き荒れた。評判作は軒並み“予約”がかかり、一時はさながら争奪戦の感を呈した。この人気いつまで続くのだろうか。

いずれにしろ図書館が繁盛することは館員としても嬉しいかぎり。とかく工科系の図書館といえば堅い本ばかりという印象を持たれがちだが、最近では当館も“よみもの”を増やしています。

読書の秋、ぜひ図書館においでください。(P・Q)

学校法人大阪工大摂南大学図書館報

No.20 (1989. 10)

編集発行 大阪工業大学中央図書館

〒535 大阪市旭区大宮5丁目16番1号

TEL 06-952-3131